

与謝野晶子訳『蜻蛉日記』の成立

——堺市蔵・自筆原稿の考察を中心に——

アダチ マサトシ
足立 匡敏

一. 晶子訳『蜻蛉日記』

昭和 13 (1938) 年 4 月 15 日、『現代語訳国文学全集』(非凡閣) の第 9 卷(第 18 回配本) として、与謝野晶子訳『平安朝女流日記』が刊行された。この中に、「昨年アダチの夏新しく訳した」(「解説」) という『蜻蛉日記』の現代語訳が収められている(以下、晶子訳『蜻蛉日記』と呼ぶ)。以下、この晶子訳『蜻蛉日記』の成立と現代語訳の方法について、堺市蔵の自筆原稿の考察をとおして、追究を試みたい。

二. 晶子訳『蜻蛉日記』の成立

(一) 堺市蔵・『蜻蛉日記』自筆原稿について

堺市立文化館与謝野晶子文芸館に、晶子訳『蜻蛉日記』の自筆原稿(原稿用紙・ペン書き) が 112 枚所蔵されている。今回、原稿を調査すると、下訳と思われる原稿(原稿 A と仮に称する) と、清書の段階と思われる原稿(原稿 B と仮に称する)、さらに下巻の梗概と思われる原稿の計 3 種類の原稿があることが判明した。それぞれの原稿の内訳をまとめたものが、【資料 1】である。

原稿 A の種類に分類される原稿は、原稿用紙計 104 枚分。上ノ上の 1 枚と中ノ下の 1 枚の計 2 枚を欠くものの、ほぼ全ての原稿が揃っている。一方、原稿 B は、清書を書き損じたために出版社等に渡らなかったと思われる 4 枚のみが、所蔵されている。なお、下巻の梗概と思われる原稿については、後述する。

まず、原稿 A と原稿 B の例を見ながら、晶子訳『蜻蛉日記』が誕生する過

資料 1. 自筆原稿の内訳

巻	原稿 A（下訳）	原稿 B（清書の書き損じ）
上ノ上	14 枚 * p. 11 の 7 行～ p. 14 の 3 行の 1 枚分欠	2 枚 * p. 9 の 11 行～ p. 10 の 1 行。 p. 55 の 10 行
上ノ下	12 枚	1 枚 * p. 82 の 11 行～ p. 83 の 2 行
中ノ上	13 枚	
中ノ中	18 枚	
中ノ下	10 枚 * p. 158 の 8 行～ p. 160 の 5 行の 1 枚分欠	
下ノ上	13 枚 * 13 枚目のオモテ面途中から「下ノ中」	
下ノ中	13 枚	
下ノ下	11 枚	1 枚 * p. 253 の 9 行～ p. 254 の 4 行
計	104 枚	4 枚

下巻の梗概	4 枚
-------	-----

総合計	112 枚
-----	-------

* 巻・頁数は、与謝野晶子訳、今西祐一郎補注『平凡社ライブラリー 141 蜻蛉日記』（1996 年、平凡社）に対応する

程をたどってみたい。以下に挙げるのは、晶子訳『蜻蛉日記』の 259 ページ 10 行目から 260 ページ 2 行目（平凡社ライブラリー版では、253 ページの 9 行目から 254 ページの 2 行目）に該当する原稿 A（【資料 2】）と原稿 B（【資料 3】）とそれぞれの翻字である。また【資料 4】は、対応する部分の刊行本文^①である。

原稿 A と原稿 B の訳文を比べると、原稿 B の方が刊行本文に近く、原稿 A は、その前段階であることが分かる。また原稿 A では、和歌が引用される箇所「・・・」の記号が書かれるのみで、和歌本文が書かれていない。こうしたことから、原稿 A を下訳段階と判断した。

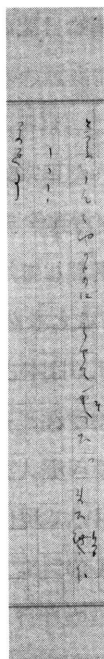
資料 2

翻字

と云ふたを他のものにかゝせて^きあつた。また自分から

 その返事

原稿 A



(堺市蔵)

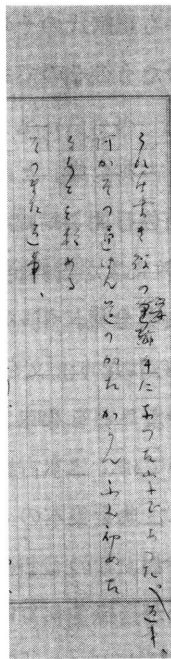
資料 3

翻字

これは書き役の筆跡手になつた字であつた。返事、
 何かその通はん道のかたからんふみ初めた
 るあとを頼める
 そのまた返事、

字

原稿 B



(堺市蔵)

資料 4

刊行本文

これは書き役の手になつた字であつた。返事、
 何かその通はん道のかたからんふみ初めたるあとを頼める
 また彼から、

つまり晶子は、まず下訳をした上で、現代語訳を完成させてゆくことが分かる。

なお、堺市立文化館与謝野晶子文芸館には、晶子著『新新訳源氏物語』と晶子訳『蜻蛉日記』の原稿が、654 枚所蔵されているけれども^②、【資料 3】のように引用された和歌の本文が書かれている原稿は、この 1 枚のみである^③。

(二) 現代語訳に用いたテキスト

次に、晶子が『蜻蛉日記』のどのテキストを用いて現代語訳をしたかについて考えてみたい。晶子訳『蜻蛉日記』の「解説」で、晶子は次のように述べる。

蜻蛉日記には誤りのない本は少い。正宗敦夫氏が古典全集に採られた本を私は主として用ひ、訳本の性質上意味の通らぬ所だけは流布本に由つて補つた。然かも正宗氏のその本が無かつたならば蜻蛉日記の譯本などは到底出来なかつたものなのである。

正宗敦夫の「古典全集」とは、昭和3年に刊行された正宗敦夫編纂校訂『日本古典全集 土佐日記 蜻蛉日記 更級日記』（日本古典全集刊行会）のことである。「正宗敦夫氏が古典全集に採られた本を」「主として用ひ」という意味が、正宗が古典全集に用いた版本を用いたということなのか、それとも、「古典全集に採られた本」文を「用ひ」という意で、日本古典全集本の『蜻蛉日記』を用いたことを意味しているのか分からないけれども、いずれにせよ、その本文については、日本古典全集本で知ることができる。実際、晶子が述べるとおり、日本古典全集本の『蜻蛉日記』の本文を用いて現代語訳した形跡は、随所に見受けられ、このことについては、すでに平凡社ライブラリー版の補注で今西祐一郎氏が指摘されている。

ここでは、晶子が用いた「流布本」が何かについて検討したい。次に挙げるのは、晶子訳『蜻蛉日記』の66ページ7行目から9行目（平凡社ライブラリー版では73ページ1行目から3行目）である。

師走の三十日には隣の女御様の住居で晝間からこほこほ、はたはたと云ふ音がして年の終りの厄拂ひの催されたのを自分は獨笑みをして聞いてゐた。

ところが、この部分に対応する原稿^④を翻字すると、

師走の三十日

半三月末日に地しんがあつた。俄かに大地がうごき出し、たのである。ひ

う う

るにもまたこほこほ、はたはたといふ音が立つのをきいて、自分は獨笑みをしてゐた。

となる。刊行された本では「年の終りの厄拂ひの催された」と訳された部分
が、原稿 A（下訳）の段階では、「地しんがあつた」と訳されているのである。
晶子は、なぜこのような訳をしたのか。

日本古典全集本の該当箇所を見ると、「なまと云ふ物試みるを」という本文
になっている。晶子は、この本文では意が通らなかったために、何か別のテキ
ストを参照したのではないだろうか。

そこで、晶子訳『蜻蛉日記』が刊行される昭和 13 年までに刊行された『蜻
蛉日記』の諸本の該当箇所を整理すると、次の【資料 5】のようになる。

表を見ると、『日本文学全書第五編』が、「地震（なる）といふもの、俄に振
るを」という本文を採り、また『国文大観』も「なる」の本文の可能性を示し
ているのが分かる。晶子は、下訳の段階で、博文館の『日本文学全書』か、板
倉屋書房の『国文大観』を参照していたのではないだろうか。この仮説につい
て、さらに検討してみたい。

晶子訳『蜻蛉日記』の 227 ページ 5 行目から 6 行目（平凡社ライブラリーで
は 224 ページの 4 行目から 5 行目）で、右馬頭藤原遠度からの手紙の文面を

石の上と云ふことは御存じでせう。（いそのかみふりにし戀の神さびてた
たるに我れはいぞねかねつる）

と訳し、「石の上」という言葉から想起させる歌として、『古今集』の歌を注
記しているところがある。該当箇所について、日本古典全集本を見ると、

石の上と云ふ事は知し召したらんかし。

と書かれているのみであり、歌についての注記はない。ところが、先ほどの
『日本文学全書』の該当部分を見ると、頭注に「古今雑 石上ふりにし戀の神
さひてたゝるに我れはいそねかねつる。」とあり、晶子が訳文に引用した歌が載

資料 5

書 名	本 文
正宗敦夫編纂校訂『日本古典全集 蜻蛉日記』 (昭和 3 年、日本古典全集刊行会)	なまと云ふ物試みるを
版本 (文政元年版) *九州大学附属図書館 日本古典籍画像データベース	なまといふもの心に見るを
坂徴『かげろふの日記解環』 (天明年刊) *九州大学附属図書館 日本古典籍画像データベース	なまといふもの心みるを
小中村義象、落合直文、萩野由之校訂『日本文学全書第五編』 (明治 23 年、博文館)	地震といふもの、俄に振るを
松下大三郎、丸岡桂編『国文大観』 (明治 36 年、板倉屋書房)	なま [ゐカ] といふもの心 [俄カ] に見 [ふカ] るを
武笠三校訂『有朋堂文庫 平安朝日記集』 (大正 2 年、有朋堂書店) 中山泰昌編『校註日本文学大系 第 3 卷』 (大正 14 年、国民図書) 長坂金雄編『雄山閣文庫 第一部 23 校訂仮名日記集』 (昭和 13 年 3 月、雄山閣)	なまといふものこゝろみるを
池邊義象編『校註国文叢書 第十二冊』 (大正 3 年、博文館)	なまといふものこころみるを
物集高量校註『日本文学叢書』 (大正 7 年、廣文庫刊行会)	なまと云ふ物試みるを
吉澤義則訳『全訳王朝文学叢書 第十一巻』 (昭和 2 年、王朝文学叢書刊行会)	雛といふものやつて見るところ
池田龜鑑訳『物語日本文学 第八巻 蜻蛉日記上』 (昭和 10 年、至文堂)	膾といふものを拵へることになる
喜多義勇著『蜻蛉日記講義』 (昭和 12 年、東京武蔵野書院)	なまといふもの試るを

せられている。同様の注記は、他には吉澤義則訳『全訳王朝文学叢書』にしかなく、晶子が『日本文学全書』を参照していた可能性はかなり高い。なお、先ほどの【資料 5】で『王朝文学叢書』が、晶子訳の刊行本文と同じく「雛といふものやつて見るところ」と訳していたこともあり、晶子が『全訳王朝文学叢書』を参照していた可能性も考えられる。しかし、調査した限りでは、『全訳

王朝文学叢書』を晶子が参照していたという積極的な証拠は、見出せない。晶子が「年の終りの厄拂ひ」と訳せたのは、『蜻蛉日記』中ノ下の末尾に、大晦^{おおつご}日の儺^なの行事が書かれているのを参考にするなどして、晶子が独自に解釈した結果であるとする。

晶子が『日本古典全集』に加え、『日本文学全書』を参照していたことについて、思い合わせられることがある。以下に引用するのは、明治40年4月の『女子文壇』に載った「手の上の氷」である。晶子が『源氏物語』の講義を行っている^{てい}体で書かれた文章である。

今日讀むで頂きますのは、蜻蛉の巻の、博文館本の三十五枚目からで御座います。板倉屋本では二十三枚目になつて居ります。

文中の「博文館本」というのは、『日本文学全書』、板倉屋本というのは『国文大観』のことである。つまり、晶子は、『源氏物語』の講義を思わせる文章の中でも、『日本文学全書』本を登場させているのである。この書について、神野藤昭夫氏は、「与謝野晶子の読んだ『源氏物語』」（『源氏物語へ 源氏物語から』2007年、笠間書院）の中で、

『日本文学全書』の『源氏物語』は、落合直文・小中村義象・萩野由之の三人の校になり、頭注が付されているものの、現代の感覚からいえば、簡略である。本文と向き合って読むにはいかにもふさわしいから、ある時から晶子の好んで読むテキストとなったことは想定しておいてよいだろう。

と述べられている。

コンパクトなサイズで、簡潔な注を付している『日本文学全書』は、「本文と向き合って読」もうとする晶子には都合のよい本であり、晶子は『蜻蛉日記』を現代語訳する際にも、日本文学全書本を参照したのだと考えられる。

(三) 未発表の下巻梗概原稿

晶子訳『蜻蛉日記』の成立過程を窺うことのできる原稿が他にもある。「(以下こうがい)と冒頭に記され、『蜻蛉日記』下巻の梗概の訳文が書かれた4枚の原稿^⑤である。原稿用紙の表裏両面(計8面)に訳文が書かれており、下ノ上の部分の梗概が約3面分、下ノ中が約4面分、下ノ下が約1面分ある。この原稿は、刊行された晶子訳『蜻蛉日記』には収載されておらず、また他の雑誌等に掲載された形跡も確認できない。この原稿は、どのようなものなのであろうか。

下巻梗概の原稿2枚目のオモテ面後ろから4行目以降に、次のような訳文が書かれている。

兼家も見物に出たことをきいた。次の日に

．．．．

と云ふうたを作者はおくつた。「少しも気がつかなくつた」と彼れは云つたとか。

道綱母が兼家に対して歌を贈った場面が訳されている。しかし、これは誤訳である。正確には、道綱が大和守の娘に歌を送る場面なのである。この部分について、原稿Aの該当部分の原稿^⑥を見ると、

五位は巧みにあとをつけていつて家を見そ ってきた
．． 届け

こんなうたをおくつたさうである。あちら(引用者注、大和の守の娘)では何のことかわからぬと云ふやうなあいさつをしたらしい。

となっており、「五位」(道綱)から大和守の娘へと歌が贈られた場面が、正しく訳されている。これは、刊行された本文でも同じである。

五位は巧みに後をつけて行つて家を見届けて來た。次の日に五位は、

思ひそめ物をこそ思へ今日よりはあふひ遙かになりやしぬらん
こんな歌を送つたさうである。彼方では何のことが解らぬと云ふやうな挨拶をしたらしい。

(晶子訳『蜻蛉日記』200 ページ4 行目から6 行目〈平凡社ライブラリー版では198 ページ2 行目から5 行目〉)

下巻梗概の原稿、原稿 A、刊行本文の、三種の訳文の関係から考えると、下巻梗概の原稿は、原稿 A の段階よりも前に書かれていたと思われる。なぜなら、原稿 A や刊行本文で正しく訳していたものを、梗概にする際に誤訳したという順序を想定し難いからである。

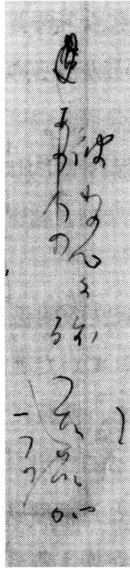
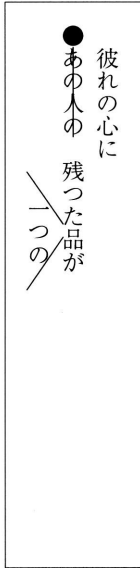
つまり晶子は、兼家の訪れが途絶えてゆき、兼家と道綱母以外の記述（たとえば、養女に対する右馬頭藤原遠度の求婚話など）が増える『蜻蛉日記』下巻部分をさほど重要視せず、抄訳にすることを当初考えていたのだと思われる。『蜻蛉日記』は、上巻、中巻こそが醍醐味であるという判断があったのだろう。

また、そうした判断に傾いたのには原稿の締め切りが切迫し、抄訳にせざるをえなかった事情が或る時点まではあったのかもしれない。晶子が『蜻蛉日記』訳を執筆したのは、昭和 12 年 3 月に脳溢血で倒れ、数週間の静養を経て回復してまもない同年の夏であった。

『現代語訳国文学全集』の刊行は、第 5 回配本の第 8 巻『土佐日記・更級日記・十六夜日記』の刊行遅れと、当初一冊で出す予定の第 18 巻が上下に分かれたことにより（第 11 回と第 17 回で配本）、第 18 回配本の晶子訳『蜻蛉日記』の刊行時点で、当初の予定より 2 ヶ月の遅れが生じていた。この 2 ヶ月の遅れが、下巻の全訳を晶子に可能にさせる時間を与えた可能性もあるであろう。

資料 6

傍線部の原稿と翻字



(堺市蔵)

刊行本文

帳臺の柱に結び附けて置いた小弓の矢をこの使に渡して貰ひたいと云はれてある。彼の心に残った一つの品が成る程あつた。これであると思つて、紐から解き下して、

原文

「丁^{ちやう}の柱に結び附けたりし小弓の矢取りて」と有れば、「是れぞ有りけるかし」と思ひて、解き下ろして、

三. 晶子の訳出の方法

最後に、晶子の現代語訳の方法について、原稿に見られる推敲過程をとおして考えてみたい。

【資料 6】は、晶子訳『蜻蛉日記』上ノ上の 19 ページ 9 行目から 11 行目（平凡社ライブラリー版では 26 ページ 5 行目から 6 行目）に対応する『蜻蛉日記』原文（正宗敦夫編纂校訂『日本古典全集』本に拠る）と晶子訳の刊行本文、そして稿者が刊行本文に付した傍線部の原稿とその翻字である。

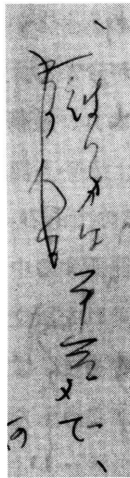
もう 10 日も訪れない兼家から道綱母のもとへ手紙が届く。手紙には、道綱母の家の帳台の柱に結びつけた小弓の矢を返してほしいという内容が書かれていた。道綱母が探してみると、書かれていたとおりに「小弓の矢」が見つかったという場面である。

原稿を見ると、兼家を「あの人」という呼称で訳した後、「彼れ」という呼

資料 7

傍線部の原稿と翻字

その人は
彼自身は平気で、



(堺市蔵)

刊行本文

利かぬ氣の女房などで「若い立派なあなた様がこんな待遇に御辛抱なさる必要もない。」と云ふ者もあるが、彼自身は平気で、「私の悪いと云はれるわけが分らない」と邪氣のない風を見せてゐるのであるから、

原文

生さかしらなどする人は、「若き身そらに何とかくては」「〇と脱力」云ふ事も有れど、人はいとつれなう、「我れや悪しき」など、

称に訳し直していることが分かる。晶子訳『蜻蛉日記』では、通常、兼家の呼称は「彼」に統一して訳されており、晶子が、「あの人」という呼称を用いて一旦訳していたのは、注目される。

晶子は、この部分を訳す際、10日も訪れのなかった兼家に対する道綱母の不満や批判の気持ちをくみとって、「あの人」という心理的な距離をもたせたことばを兼家の呼称に用いたのではないか。しかし、兼家の呼称を統一する意図から、すぐに「彼」という語に直したのではないだろうか。

同じような例が、他にもある。【資料 7】は、晶子訳『蜻蛉日記』の 28 ページ 9 行目から 11 行目（平凡社ライブラリー版では 35 ページ 7 行目から 9 行目）に対応する原文（正宗敦夫編纂校訂『日本古典全集』）と晶子訳の刊行本文、刊行本文に付した傍線部の原稿とその翻字である。

勝ち気な女房に別れを促す言葉をかけられるほど、兼家が訪れないことへの

道綱母の嘆きは深いにもかかわらず、兼家はまったく悪びれない様子を見せる場面である。

ここでも原稿に着目すると、晶子は、兼家を「この人」という呼称で一旦訳した後に、「彼自身」という語に訳し直しているのが分かる。女房から別れを促されても、なお兼家を思う道綱母の気持ちをくみとり、道綱母の範疇に属する人として兼家を認識している呼称である「この人」という語で訳したものの、先の例と同じように、「彼」という呼称に戻しているのである。

これら二例からは、晶子が、原文を解釈し、現代語訳する中で、兼家に対する道綱母の心理的な距離の変化を感じ取り、一旦はそれを訳文に表すことがありながらも、すぐに修正し、あえて「彼」という呼び方で、すなわち兼家との関係を一定に保って訳そうとしていたことが窺える。こうした方法について、さらに考えてみたい。

晶子訳『蜻蛉日記』の「解説」で、晶子は次のように述べる。

右大將に兼家がなつた頃からは敬語でその人の事は語られて居るが、一人稱で書いた小説として取扱つた譯者は、前の文章の續きとして猶彼とだけ云ふことにした。

『蜻蛉日記』の途中から兼家に対して敬語が使われており、兼家の語られ方が変化していると理解しながらも、「一人稱で書いた小説」として「取扱つた」ために、あえて「彼」という呼び方で訳し続けたというのである。

つまり晶子は、折々の心情を即時的に記した日記としてではなく、或る時点における作者道綱母の視点から記述された一人称小説として『蜻蛉日記』を捉えているのである。そこで晶子が、一人称で書かれた小説についてどのように認識していたのか、さらに考えてみたい。

ここに引用するのは、昭和5年に国風館から刊行された晶子の『女子作文新講』巻四、「六、三人称の表現」の一節である。

小説其他の文学的作品では、作中の人物が「私は」と云つてゐるので、それを作者自身であると考えてはならない。文学者はしばしば自分の實際経験を「一人称」でも「三人称」でも書くが、その場合でも、必ずしも實際経験ばかりを書いては居ず、作中の人物として書くのであるから、作者の心の上に生じた想像上の感情や事件が加はつて、作者自身の写実では無く、そこに別の人間が創作されてゐるのである。

晶子は、たとえ「一人称」で書かれていても、「小説其他の文学的作品」では、作者自身とは異なる作中の「私」が創作されることを論じている。そして同様に、晶子は、そうした性質を『蜻蛉日記』にも見出していたのである。晶子訳『蜻蛉日記』の「解説」の中で、作者道綱母を評して、

兼家と他の幾人かの女との恋愛関係は恨みつつも自身が一段上の地歩を占めて居る自信はあつて、客観的に批判を下す余裕も持てて、日記に書かれてある程の苦痛を實際としては嘗めて居なかつたのであらう。

と述べる。晶子は、日記の書きようから、物事を客観的に批判する力を作者道綱母に見出すと同時に、日記の創作性・虚構性を指摘している。

このように、晶子は、『蜻蛉日記』の虚構性や創作的な側面、また道綱母の冷静な批評眼に着目していた。したがって、『蜻蛉日記』を訳すのであれば、「一人称で書かれた小説」として訳すのが、その本質を伝える最善の方法だと考えたのである。先に見たような、兼家を一貫して「彼」という呼称で訳すのも、物事を冷静に見つめる一人称の語り手・道綱母を創り出す格好の手段なのであった。

大正末年から、宇野浩二らによって、「私」を掘り下げてゆく私小説や心境小説が論議された。そうした小説の動向も踏まえ^⑦、晶子は『蜻蛉日記』を当時

における一人称小説として再構築しながら現代語訳したのである。

訳そうとする古典作品が現代における何であるかを考えた上で、現代語訳する。それが晶子の古典翻訳の方法なのである。

[注]

- ①刊行本文の引用は、現代語訳国文学全集第9巻『平安朝女流日記』（非凡閣）に拠る。
- ②『新新訳源氏物語』、晶子訳『蜻蛉日記』の自筆原稿は、国文学研究資料館ホームページ内の近代書誌・近代画像データベース（以下、国文研データベースとする）で画像を見ることができる。
- ③訳文に引用される和歌について、『蜻蛉日記』のどのテキストにも見られない本文になっているものがある。晶子による和歌本文の改訂という問題も今後追求されるべき課題である。
- ④原稿の画像は、国文研データベース内の与謝野晶子自筆原稿『蜻蛉日記』「上ノ下」の14コマ目の1行目から4行目に該当する。
- ⑤原稿の画像は、国文研データベース内の与謝野晶子自筆原稿『蜻蛉日記』「下巻梗概」の2コマ目から9コマ目に該当する。
- ⑥原稿の画像は、国文研データベース内の与謝野晶子自筆原稿『蜻蛉日記』「下ノ上」の26コマ目の1行目から5行目に該当する。
- ⑦引用は、逸見久美編集代表『鉄幹 晶子全集』25（2008年、勉誠出版）に拠る。
- ⑧晶子は、『女子作文新講 参考巻四』「六、三人称の表現」（昭和5年、国風館）の中で、葛西善蔵の小説に触れながら、小説のもつ虚構性を述べている。

日本の現代作家の作品中、故葛西善蔵氏の創作の或物の如きは、作者自身と作中の主人公の「私」との距離が極めて密接して、作者と作中の「私」との見分けの附き難いものがあり、従つて批評家に由つては其れを小説と見ず、葛西氏自身の身辺を記録した小品文と見做した位であるが、かう云ふ特例は極めて稀なことである。そして之を小説として見る時は、厳密に云つて、やはり作中の「私」は葛西氏自身で無く、作中の主人公であるとしなければならないのである。

* 討議要旨

中川成美氏は与謝野晶子芸文館の所蔵する他の原稿の有無を尋ね、発表者は、蜻蛉日記と新新訳源氏物語、及び歌稿であると回答した。また中川氏は、今後の方向性として新新訳源氏物語との比較を考えているかと尋ね、発表者は、蜻蛉日記の翻訳方針を踏まえた上で、慎重な比較を行っていくと回答した。今関敏子氏は、晶子の現代語訳を行う理由と翻訳態度を質問し、発表者は、晶子は古典に見られる自立した女性像を伝えたいと思っており、それを意識して翻訳している、と答えた。なお、伊藤鉄也氏は、堺市所有の蜻蛉日記の撮影の完了、同市および鞍馬寺所有の自筆原稿の公開に伴い、本館館長の講演が平成23年2月にあることを補足した。